

帰国後 2 週間以内に提出してください (厳守) A4 用紙 4 枚以内 下記項目は変更しないでください。

(海外・国内) インターンシップ報告書

2023 年 11 月 17 日提出

氏名	市川 世識
所属	獣医学院
学年	4 年
活動先名	家畜高度医療センター、日本 Mitsuishi Animal Medical Center, NOSAI Minami, Shinhidaka, Japan
期間 ① (出発日ー帰札日) ② (インターンシップ 実施開始日ー終了日)	① 2023 年 10 月 29 日-11 月 4 日 ② 2023 年 10 月 30 日-11 月 3 日

・活動目的

【大動物診療における高度診断技術・肉眼解剖技術の習得】

病理献体を用いて獣医療技術向上の機会を提供できるのかの検討

自身の臨床獣医師としての技能向上

【北海道における産業動物獣医療の現状把握・関係者とのコネクション構築】

現場に還元される有意義な研究を立案するために臨床現場の視察

関係者とのコネクションを構築

・インターンシップ先を選択した理由

【多い症例数・高い診断治療技術・教育環境】

家畜高度医療センターは北海道で 3 つ(他、社台ホースクリニック、帯広畜産大学)しかない産業動物の二次診療施設兼検査施設であり、高度な獣医療が必要な産業動物が年間 1000 件以上運ばれてくるため、自身が十分な経験を積める環境であるからである。また、センターで働く獣医師たちは経験豊富で、高い診断・治療能力を有しているからである。さらに、家畜高度医療センターは数十年もの間北海道内に限らず産業動物獣医師の研修を行ってきた歴史があり、高い診断技術とともに研修における教育ノウハウも備わっているからである。

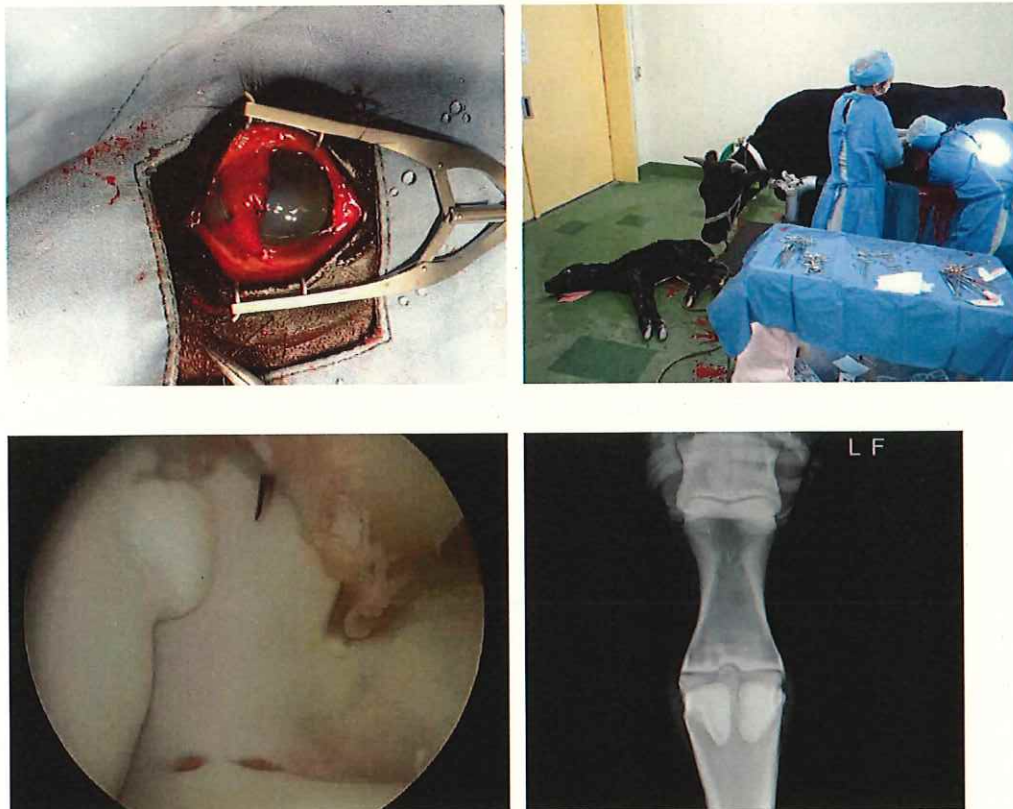
・活動内容・成果 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

以下のスケジュールで手術に参加した (Table 1)。二次診療施設であることから外科手術がメインであるものの、それ以外にも治癒が困難であると推測される外傷の縫合や剖検による死亡診断の確定、跛行診断を行っていた。

Table 1. インターンシップスケジュールの概要

	9:00	12:00	13:00	15:00	17:00	19:00
10月30日	Tie Forward		Tie Back		関節鏡 (腕節)	
10月31日	関節鏡 (飛節) 外傷 (腕節)		軟骨下骨嚢胞		角膜穿孔 剖検 (脾破裂)	
11月1日	軟骨下骨嚢胞 肢軸異常スクリュー抜去		外傷 (体幹)		跛行診断	
11月2日	骨折プレート抜去 疝痛		関節鏡 (飛節) + 臍ヘルニア		跛行診断	
11月3日	研修 (エコー)		研修 (レントゲン)		疝痛 疝痛	
					帝王切開 剖検 (盲腸穿孔)	
	呼吸器 眼科 繁殖 運動器 跛行診断 その他 外傷 消化器					

Figure 1-4. 症例写真



家畜高度医療センターが対象とする外科手術は多岐にわたっていた。呼吸器、運動器、眼科、繁殖などの分野のすべてに対応し、診療対象は馬（競走馬；当歳、1歳、現役馬、繁殖牝馬、乗馬）および牛であった（Figure 1-4）。研修では、エコーによる運動器疾患および消化器疾患の診断、レントゲンによる運動器疾患の診断および競走馬レポジトリ写真撮影の習熟を目的としており、日高管内の若手 NOSAI 獣医師が多数参加していた。また、診療後に「軟骨下骨嚢胞の治療法と現状」および「PRP 療法の効


果」について講義を受けた。インターンシップ中は、麻酔導入後の挿管、心電図・導尿カテーテルの設置、動静脈留置の設置、術中麻酔管理、助手として術野の確保・縫合補助を実際に行った。また、エコー・レントゲンの研修にも参加した。

・今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

今回のインターンシップで目的の一つである「獣医療技術の向上を目的とした病理検体の使用の検討」について関係者と議論を行った。基本的な切開および縫合の練習はもちろんのこと、一部外科手術（特に呼吸器系）については病理検体を使用した練習は貴重な経験となりえると考えられた。また、エコーやレントゲン、局所麻酔（関節麻酔、神経ブロック）については、やり直しがきくこと、注射部位の確認が行える病理検体を用いた練習は効果的であると考えられた。自身の獣医療技術の向上に関しては、今回のインターンシップを通してある程度の向上は認めることができたと考えられるものの十分ではないことは明らかであるので、これからも習熟の機会を逃すことなく努力する必要がある。いくつかのテーマについては現状説明を受け、インターンシップで診療に参加する中で産業動物獣医療のニーズや問題点が感じ取れた部分もあった。

・後輩へのアドバイス

先方との事前準備の期間が必要なのはもちろんだが、出発の2か月前までにWISEオフィスの提出物を用意することの方がハードルに感じた。また、直接インターンシップに行った先輩・同期に聞くことによってしか得ることのできない情報もあるので、ぜひ情報収集を行ってから、準備を行うことをお勧めする。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 比較病理学教室 教授 木村享史 
---------	---

- ※1 電子媒体を国際連携推進室・卓越大学院プログラム担当に提出して下さい。
- ※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。
- ※3 本報告書は卓越大学院プログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：VETLOG